

花

しづ

月

宮原みさを

亭

千曲川 瘦せて 蝉声 渡り来る

行く夏を見送って 悔なしとせず

花筏 ひしめき あへり 神田川

そばを打つ音の跡 切れてしぐれけり

どんぐりの又 落つしじま ありにけり

居酒屋の樽椅子が好き春の宵

青簾倦くや小浅間大浅間

風神を道連れとして青嵐

螢の恋の囁き聞き洩らす

春宵の六区赤い灯撒き散らす

ネオンより寒の西日の煌びやか

クレーン車で瓦を運び屋根を替ふ

菰の咲くさびしき小径つづきけり

冬の蠅門扉にすがりゐたりけり

花あやめ俯き加減雨来るか

朝顔の鹿の子絞や震災忌

扇風機秋めく風にたぢろぎぬ

燃える塵燃えない塵や八月果つ

螢火のこぼれて音のなかりけり

荒梅雨やごうごうと鳴る神田川

桐咲いて天日昏くありにけり

うららかや猫が媚売る谷中路地

乾鮭の石狩を恋ふ眼の虚ろ

二月来る抜き足差し足忍び足

逝く年の川の流れを見て飽きず

まほろばの白帆浄土や水芭蕉

悪臭のどぶ板いまなし一葉忌

麦秋や真只中の一里塚

ちちろ鳴く海に夜な夜な漂へり

重ね着に更に重ね着戻り寒

絵馬揺れて湯島天神陽炎へり

螢籠見せ合ひし夜を懐しむ

野遊びの赤子の一步二歩三歩

ちぎれ雲はぐれ雲さて花の雲

鳴神の落ち所なくさ迷へり

扇風機廻る酷暑に追ひつけず

甘くない大福と言ふ漱石忌

行く夏や一本杉の村境

水餅の黴の文様水に浮く

薫風に恍惚として鬼瓦

夜焚火の誰かが風を連れて来る

夏霧に封じ込めらるる賽の神

犬を曳き曳かれて帰る朧かな

雷の行方知らずとなりけり

風鈴の風待ち顔でありけり

漁火の端に掛かるや天の河

蝮 蛄 鳴くと早耳空耳地獄耳

東の空はんなりと冬終る

陽炎の中より老婆現はるる

口ポットに何の秋思ぞ俯ける



発行 二〇〇二年九月朔日

著者 宮原みさを

句集 花月亭

非売品 限定八十部 番

印刷

HIRO制作室

東京都中野区中央二の五十の三
(落丁・乱丁お取替えしませ)

製本

花岡製本所